佛教大学　文学部論集　第96号（2012年3月）

中国雲南省元陽県棚田地域における観光開発と地元民の対応

孫　　潔

〔抄　録〕

本論では、中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州に属している元陽県を舞台に、2000年から観光開発が行われてきた箐口村を事例として取り上げ、地方政府による観光開発の実態と地元民の対応の実践を包括的に明らかにすることを目的としている。特に観光開発初期に、民族観光で潤わなかった地元民の一部分に焦点を当て、その後の観光業の展開に伴いながら、彼らがいかに観光業に参与してきたのかを人類学的に考察する。

キーワード　元陽県、箐口村、観光開発、地元民の対応

1．はじめに

人類学における観光が研究テーマとして登場したのは、1974年にメキシコで行われたアメリカ人類学学会において観光に関するシンポジウムが開催されたのが最初であった。その後、このシンポジウムの内容が、バレーン・L・スミスによって*Host and Guest: the Anthropology of Tourism* という論文集として刊行された[Smith1977]（注1）。この本では、観光者を受け入れる側であるホストとその地域を訪れる観光者であるゲストとの関わりが論じられている。当時、観光を行うことができると考えられたのは、時間的、経済的に余裕があり、産業革命の恩光に恵まれた西欧諸国の人々である。一方で観光目的地とされていたのは、まだ「未開」、「野蛮」の段階にあると見なされている第三世界の国々、もしくは自国の辺境地域に位置する先住民居住地域である。このように、ホスト側とゲスト側は文化的価値、経済的発展などが非常に異なるため、両者の間に摩擦が絶えず生じる。

ホストとゲストという二元対立構造的な軸を基にする研究が長い間に観光人類学の分野において中心となっており、特に観光の影響によるホスト社会の文化の変容をめぐって従来の研究は大きく二つに分けられる。一つ目は観光産業の浸透により、ホスト社会の伝統文化・民族文

化が破壊され、商品化されてしまった伝統文化のあり方に焦点を当て、ゲスト側が一方的にホスト側より有利な立場に立っているため、ホスト側は経済的な利益を優先させ、ゲスト側を思う存分に遊ばせ、「負の」影響力のある観光を非難している「ナッシュ 1991：51、クリスタル 1991：193–213など」。二つ目は観光による文化の再構築、民族のアイデンティティー強化などの側面に焦点を当てた研究である[山下2001：104–112、江口1998：172–173など]。例えば、山下は、インドネシアのバリ島の民族芸能を取り上げ、観光が伝統文化を刺激し、新しい文化創造に貢献していたと論じている[山下2001：104–112]。これらの研究は観光においては、エリック・ホブズボウムが指摘した「伝統の創造」という現象が頻繁に見受けられると考えられている。

しかしながら、観光人類学の研究においては、ホストとゲストという単純な一対一的構造では解釈できない問題がまだ多く残されている。まず、訪れる外部者に「観光客」というラベルを貼って画一的に認識していることがあまり妥当ではないと考えられる。観光客は年齢、性別、民族、観光動機などがそれぞれ異なっている。そのため、誰がどのように観光しているのか、そしてどのような観光経験をするのか、ゲストの様々な要素によって多様性があるはずである。一方、ゲスト側の要望の複雑さに対して、ホスト社会内部ではしばしば葛藤が生じ、一枚岩では捉えられないとも考えられている。例えば、江口はカリブ族の間に、観光化を私益のために推進したい人たちと、全体のために推進したいと考えている人たちの二つの勢力があると述べている[江口1998：176–177]。また、中国政府の「改革開放政策」下において展開しつつある、少数民族観光に関する研究では、とりわけホスト社会内部の両極化が進展していく様子が描き出されている[瀬川2003、長谷川2001など]。

中国においては1980年代後半から、地元の文化的な資源を掘り出し、「民族風情」を主題とする民族観光活動が次々と現れてきた。これまで社会主義国家建設への障害とみなされた民族の伝統文化は、再評価の方向へと転換し、各地で少数民族文化の復興が動き始めた[鈴木1993、瀬川1997、曾1998など]。少数民族文化を題材とした民族観光開発はホスト社会に観光収入をもたらし、村民たちに新しい経済的・成功的の機会を提供していることは明かである。しかしながら、瀬川は中国海南島の事例を取り上げ、積極的に民族文化の特色を文化的資本として活用しようとする人々と、消極的に伝統文化を表出する人々という現象を説明し、「エスニック観光によって潤うのは民族文化の演出と宣伝を成功させた一部分の人々のみであり、その機会をもたない人々の間では脱伝統化のプロセスが急速に進行している」と鋭く指摘している［瀬川2003：169］。つまりホスト社会の人々は民族文化への関わりにおいて、相反する二つの方向への分極化が生じていると考えられている。

ホスト社会内部に生じてきた両極化への指摘は評価できる一方で、観光開発その自体は時の流れにとともに展開しつつあり、両極化された人々はずっとそれぞれ不変の方向へ進んでいくだろうかという疑問が浮かぶ。観光化・観光の産業化の進行の度合いは国家の様々な政策の発布によって刻々と変化しており、民族観光の現状をよりよく理解するためには過去から現在ま

での変遷を把握しておく必要であると兼重も指摘している[兼重2008：134]。従って、観光によるホスト社会内部に生じてきた葛藤、また地元民は観光によって潤ったのか否か、長いスパンで考える必要があると思われる。

そして、伝統文化のほぼ保存されている村が観光開発への道が開かれやすいことと同じく、観光開発の恩恵を受けている地元人の一部分は希少で特異性のある技能、観光関連の商売を行う資本やノウハウ、或いは外国語能力を持ち合わせていると見なされる。例えば、唄や踊りの技量が優れており、多くの応募者の中から唄や踊りによって選り抜かれた少数者である [曾1998：57-62]。また中国雲南省西双版納の事例を取り上げ、地元民がエスニックレストランの経営や、家や土地を流入した漢族に貸すことにより経済的な恩恵を受けていると長谷川は指摘している[長谷川2001：107-131]。つまり、観光の恩恵に恵まれている人々は往々にして、経済的な資本や、希少で特異性のある技能のような文化的な資本を所有しているとされてきた。しかしながら、ホスト内部における二極化された地元民の対応を継時的に考察すると、観光で潤っている「勝ち組」は市場経済原理に基づき経済的な利益を最大に求めており、観光業から他の産業に移すこともありうる。一方、観光開発初期に除外されて参与できなかった地元民はそのまま不利な立場に甘受しているとは限らない。また彼らは一般的に希少で優れていると認識されるような技能やノウハウを持たないものの、それでも自分なりに新しいノウハウを創出し観光業に加入することも可能であろう。

本論では、中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州（以下「紅河州」と略す）に属している元陽県を舞台に、2000年から観光開発が行われてきた一つの村を事例として取り上げ、地方政府による観光開発の実態と地元民の対応の実践を包括的に明らかにすることを目的としている。特に観光開発初期に、民族観光で潤わなかった村民に焦点を当て、その後の観光業の展開に伴いながら、彼らがいかに観光業に参与しているのかを人類学的に考察しようと試みる。資料としては、部分的に1980 年代後半から相次いで出版されている研究報告に依拠しているが、とりわけ筆者が雲南省紅河州で2006 年―2007 年に行った現地調査に中心的に依拠することとする。

2. 調査地である元陽県の概要

元陽県は中国雲南省紅河州に属し、雲南省南部、北回帰線の南（北緯22° 49′ ～ 23° 19′ 、東経102° 27′ ～ 103° 13′ の間）、哀牢山脈の東部また南縁に位置している（図1）。元陽県は総面積が約2189.88平方キロメートルで、低平地は極めて限られており、8割以上が勾配25度以上の高くて険しい山々である。県内では標高144mの紅河沿いから2939.6mの白岩子山まで、標高差は2795mに達する。標高差が大きいため、気候の垂直変化も著しく、熱帯、亜熱帯と温帯三種類の気候帯になっている。このため「一山分四季、隔里不同天」（一つの山で高さにより四季の気候帯を持ち、一里距離が離れているだけで異なる天気になる）と言われるような非常に独特な気候を有している。

2006 年時点において、元陽県の総人口は約380,609 人で、主にハニ（哈尼）族、イ（彝）族、タイ（傣）族、ミャオ（苗）族、ヤオ（瑶）族、チワン（壮）族及び漢族など7つの民族の人々が居住しており、少数民族の人口が総人口の88％を占めている。そのうち人口数が最も多いのはハニ族で、約53.04%を占めており、次いでイ族が23.97％となっている（注２）。本論で研究対象となるハニ族（Hani）は中国西南部の少数民族の一つで、人口約143万人（2000年統計）である。国境線を越えて分布する民族で、中国国外ではビルマ、ラオス、タイ、ベトナムにも居住しており、アカ（Akha）と自称している。また、アイニー（爱尼）、イッ（奕车）などの支系（サブ・グループ）を持ち、チベット・ビルマ語族のイ語支系に属している。

図1　　元陽県の位置

元陽県では、約95%の人々が農業を営んでおり、彼らの生活の基盤は険しい高山の傾斜地に開かれている棚田（梯田（ティテン））である。棚田とは、自然環境により沿い、山のラインに従って階段状に開拓された耕地である。このような形態の耕地は中国のみならず世界中において、古くから現在に至るまで多く見られてきた。例えば、日本の千枚田、フィリピンのコルディリェーラの棚田群などがそれに相当する。元陽県において、棚田の面積が約1.27 万ha（総耕地面積の約53％に相当）あり、標高170 m から標高1980mの広い範囲に分布している。特筆したいことは、元陽県では88%以上の棚田が標高800mより高い山地斜面に位置し、傾斜度が非常に大きい。さらに、一筆ごとの面積は狭いものの広大な範囲にわたって展開されており、棚田全体の

規模が非常に大きいという点である。

2000年以後、元陽県において「ハニ棚田（哈尼梯田）」と「光と影のパラダイス」という二つの言葉が現れてきた。前者はハニ族が棚田を耕耘し、棚田の利用に長けていると一般的に認識されており、特に、現在世界文化遺産登録を申請している地域である元陽県に居住しているハニ族の人口は、他民族よりも多いからである。後者は元陽では、光と影、及び色の変化が非常に複雑かつ豊富であり、山の起伏による曲線が立体感を持った棚田の畦の効果と相俟って写真撮影には最高の地となっている。そのため、棚田の写真を撮影するために、大勢の観光客が訪れてきたからである（写真１）。しかしながら、棚田を耕している民族はハニ族だけではなく、イ族、ヤオ族、ミャオ族なども従事している。日本の棚田の定義（注３）で考えると、一部のタイ族もその耕作者に含まれている。今日ではハニ族のエスニシティの視覚的表象とでもいうべき存在となっている棚田であるが、ハニ族の特殊性、独自性を象徴するものとして形成されてきたのは、あくまで政府、民族知識人たちの作為によるものである[孫2010:123-145]。また、元陽を訪ねる観光客は殆ど棚田の写真を撮影するプロやアマチュアのカメラマンたちである。彼らは棚田がどんな民族に属しているのかに関心を殆ど持たない。それよりむしろ観光客は観光対象とされた少数民族の人々の伝統文化や日常生活に対して、手が加えられていない状態である「原生態」、現代社会からかけ離れている「時代遅れ」、非日常的な風景を期待している。従って、政府は棚田をハニ族と結びつかせ、世界文化遺産登録候補への申請活動の下で行った観光開発は、元陽に訪れてきた観光客の要望と一致していないと思われる。

写真１　「光と影のパラダイス」の代表例

（撮影場所：多依樹、2007年1月3日に撮影）

曾は中国大陸内の民族観光には大きく分けて二つの形態があると指摘している。一つは辺境の民族村を舞台にした民族観光であり、もう一つは都市および都市近郊に建設された民族のテーマパークやエスニックレストランである[曾1998：45－46]。本論の研究対象とする元陽県箐口（チンコウ）村における民族観光は前者に属している。箐口村は標高1,650メートルに立地しており、面積は５ヘクタールである。村全体に178世帯、865人が居住しており（2007年）、村民の98%がハニ（哈尼）族である。村民たちは普段ハニ語を操り、女性たちが民族衣装を身にまとっている。2000年当初、政府は観光開発の第一歩として、ハニ族の文化伝統の象徴として「蘑菇（マッシュルーム）房」を改築し始め、箐口村を「哈尼民俗生态村（ハニ族の民俗生態村）」を建設した。筆者の調査時点において、この村は元陽地域で唯一の、有料で観光客を迎える村であった。また、2000年以後箐口村の知名度は国内外を問わずに高まるようになった。中国の映画『太阳升起的地方（太陽が昇った所）』、『诺玛的十七岁（邦題：雲南の少女・ルオマの初恋）』、テレビドラマ『天下一碗（天下に一番有名な丼料理）』、及びドイツのテレビ局が取材していた『棚田、天国への階段』など、様々な番組が箐口村をロケ地として選んできた。また、2004年雲南大学はこの村に「ハニ文化研究基地」を建設した。この基地は、生態学、人類学、歴史学、民俗学などの分野で活躍している、筆者を含む多くの研究者を迎えており、この村を対象に様々な分野で調査が行われた。

本論はハニ族の文化が表象される元陽県箐口村の事例を取り上げ、まずは地方政府による観光開発の実態と観光が地元のハニ族の人々に与える影響を包括的に明らかにする。そして、観光業の展開にとともに、観光開発初期に「ノウハウ」を持たなかったとされる地元民の一部分が、いかに観光開発に参与しているのかを中心に考察することを目的としている。

3. 箐口村における観光開発

中国の観光開発は、地方の観光地開発の主体が観光業界や外来資本ではなく、地元の政府と地元住人であり、地域が自律性をもつことが特徴である [韓2007：59－60]。2000年から元陽県政府は箐口村を民俗村として観光開発を執り行ってきた。箐口村における観光開発は主に観光設備の建設と文芸隊の成立という、二つの側面から構成されている。

1）観光設備の建設

一民族のユニークさを表象するために、常に視覚的に目立つ「住宅」から観光開発に着手しはじめることはしばしばある。例えば、中国においても福建省の「客家土楼」、オロチョン族の「仙人柱」、モンゴル族のパオなどのように、伝統的な建築は、常に特定の民族集団の独自性・特殊性を体現するシンボルとして登場している。元陽県における観光開発も、まずハニ族の文化伝統の象徴として「蘑菇房」の改築から始まった。蘑菇房とは、ハニ族の伝統的な建築

スタイルで、マッシュルーム型の屋根を持つため、蘑菇（マッシュルーム）のハウスと名付けられたものである。蘑菇房の屋根は稲藁で覆われていて、風雨を防ぐことができ、また風通しもよくて、住み心地のよい空間である。元々この稲藁は1－2年ごとに一回交換されなければならない。しかし、近年収穫量の高い改良品種の稲を植えるようになり、従来の茎の長い藁がなかなか手に入らなくなった。それに加え稲藁屋根の家屋は火事になりやすい危険性を含んでおり、また都会の住宅の影響を受け、新築を建てる場合、殆ど蘑菇房を建てることは無くなった。そのため1990年代後半から、元陽県内における蘑菇房の数がますます少なくなってきたのである。2000年当初、地方政府はハニ族の伝統文化を代表できる村を選別し民俗生態村を建設する際、蘑菇房の保有数が重要な要素となった（写真２）。その時、箐口村全体の敷地面積は広くないものの、蘑菇房が殆どそのまま残っており、改築しなければならない住宅が50軒ぐらいしかなかった。隣接している麻栗村や全福庄と比べると、箐口村の世帯数は少なく、また蘑菇房に改築する規模や必要な資金などが比較的少なく、さらに大通りまでの距離も近いことから観光者が入村しやすい点などが考慮され、それまで無名だった箐口村は元陽地域で唯一の、有料で観光者を迎える村と変化した。

写真２　　箐口村の蘑菇房

（撮影場所：箐口村、2007年1月10日に撮影）

2000年から2004年にかけて、元陽県政府は約200万を投資し、箐口村を「ハニ民俗文化生態

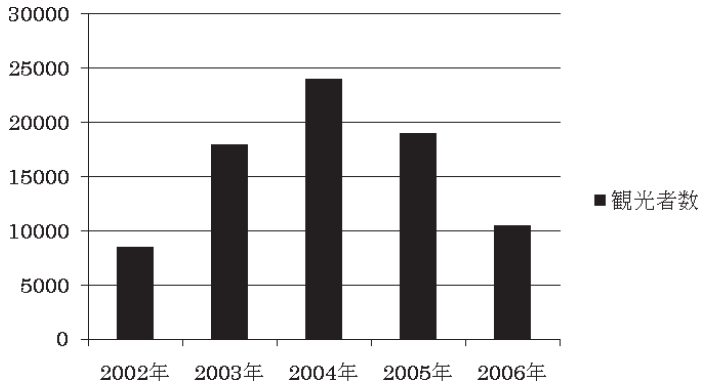
村」と改名し、観光開発を執り行ってきた。まず、村内の民家は中身の新旧を問わず、「蘑菇房」の文字通りに屋根を稲藁で覆い、マッシュルーム型に改築された。蘑菇房に改築し、また維持するために、敷地面積1平方メートルに45元の補償金を村民へ支払う政策も講じた。村中心部には「ハニ民俗生態陳列館」を建て、ハニ族およびハニ族のサブ・グループに関する分布、歴史、文字、服飾、農具などを展示した。そして、散策コース、水車、水臼など「伝統的なハニ文化」を代表できそうな展示物を建築するとともに、村の入り口に棚田展望台の広場を整備し、蛙、水牛、タニシなど農耕文化を表象するような塑像を建て、幹線道路から村に至るおよそ2kmの道路を石畳で舗装した。今まで無名であった泉を「長寿」、「求子（子供を授ける）」と名付け、「長命百歳」、「多子多産」とめでたい意味づけもした。さらに、アメリカの先住民が家の前に立てるトーテム・ポールまでも箐口村に建てた。马は解釈人類学における文化を象徴（記号）として見なす概念を用いて、以上の観光開発手法を「伝統的な文化記号」を商品化するプロセスと「異質的な文化記号」を馴化するプロセスであるとまとめている[马2006：61-69]。このように、箐口村は村全体を文化的な記号としてハニ文化を外部世界へ表象している。

2001年10月、箐口村がハニ族の文化を展示する民俗村として開園し、入園料を10元徴収しはじめた。2002年2月、村の観光事業を順調に運営することと、或いは村民たちに観光事業を理解してもらうことを目的に、元陽県観光局が副局長を一名派遣し村に駐在させ、「管理委員会」（以下「管委会」と略す）を成立させた。また静止的・物質的な記号として蘑菇房を呈示するのみではなく、ハニ族の文化を歌や踊りなど動態的な伝統文化をも展示しようとも考えられるようになった。2003年9月、観光客や視察団を対象に、ハニ族の踊りや歌など民族芸能を披露することを担当する文芸隊が管委会の下に組織された。政府は元陽県全域から伝統芸能に堪能する年配の方を招き、これらの専門家により若者で構成された文芸隊のメンバーにハニ族の芸能を指導してもらった。文芸隊は主に視察団への接待及び観光客向け（観光シーズンのみ）に、一回に30分間前後の芸能を披露している。それ以外には、毎日一時間半の練習が課され、陳列館と広場の掃除を担当している。2007年、文芸隊は合計20名（うち8名が女性）の箐口村の一般村民で構成されていた。観光の舞台で披露する民族芸能の殆どは元来宗教的な意味合いを持ち、儀礼、葬式などで演じされており、人間が神様か祖先と繋がっていることを確認する役割を果たしていたものばかりであった。しかし、政府はただ芸能そのものがいかにハニ族の伝統文化を表象しているのかのみに興味を持ち、ハニ族らしい芸能を観光表象用の芸能として選び再構築するようになった。そのため、箐口村で演じられる芸能も、かつて男性しか踊らなかった舞踊は女性によって披露されており、葬式でしか踊らなかった踊りも観光客と一緒に楽しく踊るようになってきた。

一方、非日常的な風景を求めるために元陽まで訪れてきた観光客たちにとって、元陽県地域における蘑菇房の数が減少している中で、人為的に蘑菇房が保留されてきた箐口村は、特別な景観として惹きつけられるものである。観光客には、幹線道路から蘑菇房および棚田を遠くか

ら眺めて撮影することが必要不可欠な旅程となっている。運がよければ、雲海にも遭遇する。雲海、炊煙、人家、棚田の織り成す景観はまるで「人間の仙境」のようである。幹線道路から村に入り、トーテム・ポールの建てられた広場から棚田を眺め、陳列館を見学し、蘑菇房や民族衣装、祭祀用の牛の下顎骨、農耕生産用の農具、燃料用の牛糞などを、「時代遅れ」、「原始」、「原生態」を表す珍しい風景としてレンズに収めながら村全体を一周することは、観光コースの常となっている。 そこでは、政府により意図的に展示された蘑菇房や博物館と、また村民たちによる非意図的に見られた牛の下顎骨、牛糞などが、いずれも観光客のまなざしを惹き付ける要素として存在し、異文化に好奇心を持つ外部者たちの心理的な要求に答えている図式を見出すことができる。従って、2002年から2004年にかけて、様々な視察団が箐口村に訪れ、また観光客の数も徐々に増加してきた（図２、注４）。

図２．箐口村に訪れた観光客の数　　（単位：人）



（出所：2002年から2005年までのデータは元陽県旅遊局より、2006年のデータは箐口村景区管理委員会の統計データより作成）

2）観光開発による利益

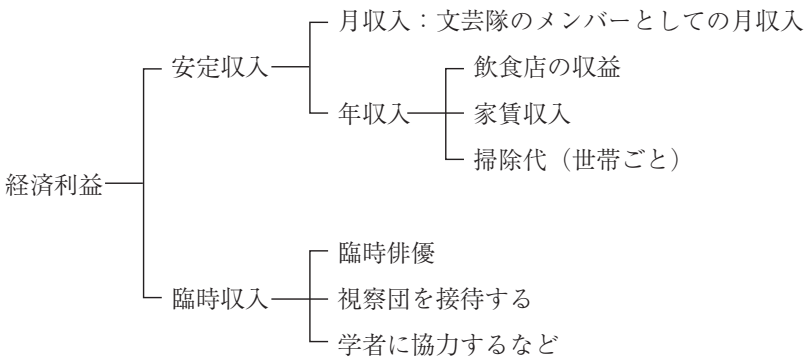
先進国であるか発展途上国であるかを問わず、一般的に観光開発は常に地域開発のひとつの手段として位置づけられ、地域や住民の所得向上および雇用促進の効果が期待される。箐口村においては、新しく導入されてきた観光開発により、ある程度で村民の人々に利益を与えきたことは明らかな事実である。

村民たちが観光から得られる経済的な利益は、収入の出所により安定収入と臨時収入に分けられている。安定収入は、さらに月収入と年収入の二つに細分化できる。第一に、月収入としては、文芸隊のメンバー一人当たりに月300元（注５）の所得がある。第二に、年収入とは、主に年末に村全員に配分される料金を指している。観光者が箐口村を見学するには15元の入園料が徴収される。これらの観光所得による総収入の70％が元陽県旅遊局へ上納され、残りの30

％が村内に返還される制度である。この30％の配分については、観光業に関する村全体の運営、例えば、文芸隊隊員への報酬、楽器の購入、懇親会の費用などを負担する以外に、残った金額を掃除代として、年末に村全体の世帯ごとに分配することとなる。また、観光開発が行われた以来、村内で４軒の飲食店（兼宿屋）が相次いで開業し、そして民族衣装を裁縫して観光者へ販売する仕立屋が４軒建った。観光シーズンにより収入は変化しているが、いずれも一年間あたり一軒に数千元～数万元の観光収入がある。それ以外に、村のメイン通りに沿って、観光者に民族工芸品を販売する売店がある。しかし、オーナーは箐口村の村民ではなく、大理、麗江など他の地域から来た商人ばかりである。そのため、自家の部屋をこれらの商人へ貸し出すことにより得られる家賃収入もある。以上の安定収入に加え、観光は村民に安定しない収入、或いは臨時収入を増加させる機会を村民に与えた。例えば、映画、テレビドラマの撮影や道具の運搬に伴う一時的な雇用が他の村と比べて恵まれている。また、世界文化遺産申請活動の進展に伴い、箐口村は上級機関が派遣してきた視察団を接待する定番の村となってきた。もてなしの厚い人情を演じすること（道端で村民は列になり拍手をさせるなど）に対し、県政府は接待ごとに村民に僅かの報酬を支払う。そのほか、前述のように雲南大学は2004年にこの村に「ハニ文化研究基地」を建設した。村民たちは学者の研究・調査に協力しており、多少の協力費が得られる。

観光開発により収入源が今までより多くなることは事実であるにもかかわらず、実際には観光業に参与している村民は非常に限られている。筆者の調査した時点において、総人口865人のうち、主に観光業を生計として営んでいる村民は35人ぐらいしかない。殆どの村民にとって、直接に手渡されている観光収入は年末に配分される入園料からの収益、いわゆる「掃除代」だけだというのが現実である。2004年から2007年までの毎年、一世帯につき平均的に約120元しか配分されなかった。四人家族である核家族（夫婦と二人の未婚子女）で推算すれば、一人当たりの観光収入は15元だけで、その金額が一人当たり年間現金収入の14％を占めるにすぎない。また、村民たちは村全域を掃除することによる報酬としか理解しておらず、観光開発を通した村興しへの意欲は一切見受けられない。人口の増加につれて、これまで配分されていた棚田から取れた食糧だけでは足りなくなり、市場で食糧を購入しなければならない世帯も多くなった。そして、冠婚葬祭による贈与や、住宅の新築などにも現金が必要となる。村民たちが現金収入を獲得するためには、結局中国農村で最も有効な方法である「打工（ダーゴウ）（出稼ぎ）」しかない。2006年に箐口村において、3か月以上に出稼ぎに行った人数は村総人口の31.13％を占めている。以上のデータから分かるように、観光収入は基本的に村の経済構造を変化させたわけではなく、また得られる収益もあまり大きく期待できないといえるであろう。

図３．観光による与えられる箐口村の経済利益の概念図



一方、このように村民が得られる経済的な収益は多くないにもかかわらず、社会的な利益の方は大きいと思われる。映画やドラマなどの撮影にあたり、様々な番組が箐口村をロケ地として選んできたため、村の知名度は国内外を問わずに高まった。また、前述の通り、雲南大学は2004年にこの村で「ハニ文化研究基地」を建設したため、箐口村に関する研究報告、論文、著作なども相次いで出版されていた（注６）。したがって、箐口村は観光客だけではなく、メディア関係、学術関係においても有名な村になり、伝統的なハニ文化をディスプレイする場所となった。僅かな経済的な利益しかないものの、観光開発に賛成する村民の比率は93％以上に達している（注７）。筆者はその理由を聞くと、村民たちは「多くの方々が私たちの村に来ていて、われわれの見聞を広めさせている」との答えが一番多かった。この村に訪れる人々の数が多ければ多いほど、村が次第に有名になると同時に、村民たちも外部者から多くの知識を得ることができており、さらに他の村の村民に誇示する話のネタを得られるようになったと理解できるだろう。

４．観光開発における村民の対応

前節で述べているように、箐口村では、実は観光業を生計として営んでいる村民は一部分しか限られてないと分かった。 観光業に参加できる人々は、レストラン業に投資できる資金を持っているか、自宅の立地条件に大通りに面しているため、貸家として利用できるか、それとも学歴が高くて共通語が話せるかなど、他の村民より経済的・文化的な優れた能力を持ち合わせているからこそ、早い時期から観光開発に参与できるようになっただろう。しかしながら、箐口村においては、観光業の展開につれて、そのような経済的、技能的な能力を持たなかったのに、観光業による生計を立てている村民が現れてきた。

1）受動的な観光開発への参与

箐口村では、投資資金や学歴を持たない一般の村民は、家族の誰かが文芸隊のメンバーとして選ばれることを期待している。何故なら、文芸隊のメンバーになると、月300元の収入を入手でき、安定的な収入が保障されるので、理想的な仕事であるからである。文芸隊が成立した当初、政府は主に若者を中心にメンバーを組織した。メンバーを選定する際には、学校教育を受けたか、共通語ができるか、民族芸能への愛着心があるか、容姿端麗であるかなど、様々な要望が課されていた。2003年9月、厳しく審査した上で、一般村民から20名をメンバーとして選び出した。20人のうち、8人が女性だった。しかし、2003年から一年間も経たないうちに、数人の男性のメンバーしか残らず、殆どのメンバーは文芸隊を去った。こうして、民族芸能が披露できなくなってしまい、政府は新しいメンバーを探さなければならない境地に追い込まれたのである。文芸隊の成立当初から筆者が調査した2007年にかけて、人員交代は常に絶えないという。文芸隊が成立した2003年、女性メンバーの平均年齢は18歳だったのに対し、2007年3月、女性メンバーの平均年齢は30歳となっており、全員が入れ替わっていた。初期の若者たちが絶えず文芸隊を離れる理由には主に二つがある。一つ目は彼らにとって文芸隊の報酬が少なすぎるという。都会へ出稼ぎに行くならば、月に文芸隊の倍以上の収入を得ることができる。また、容姿端麗な女性や、芸能の得意なメンバーは都会のエスニックレストランやテーマパークにスカウトされたこともしばしばある。二つ目は若者たち自身が村と異なる外部の世界へ行き、自分の見聞を広めたいという。大勢の視察団や観光客の到来に伴い、村民たちは外部の世界への好奇心を駆り立てられているとも予想できるだろう。つまり、彼らは観光開発初期、一時的に観光の恩恵に恵まれたものの、自分の利害関心を考えた上、結局村内での観光業からさらに利益のある産業への転職を選んだと思われる。

実は、2004年から文芸隊の女性メンバーは全員既婚の女性となっていた。管委会は安定している人員を維持するには、未婚の女性より既婚の女性を選ばざるを得なかった。しかしながら、伝統的なハニ社会は男性中心とされる社会で、特に既婚の女性が男性と同じ食卓で食事さえもできないほど、最も従属的、周縁的な存在であった。元来、既婚の女性は文芸隊に参加し、知らぬ人々の前で歌ったり、踊ったりすることは絶対許されなかったという。しかし、1950年代から政府が提唱した「男女平等」政策の浸透、管委会の幹部による説得、また目の前にある経済利益への期待など、様々な原因により既婚女性及び彼女たちの家族は文芸隊への参加をすんなりと快諾した。一方、彼女たちの加入により、文芸隊はやっと安定してきたように見えるけれど、新しい問題に悩まされてきた。新入メンバーたちは元のメンバーほど容姿等の条件が優れていないし、共通語がほとんどできなくて、視察団や観光客からの質問に答えられなかった。また教育を受けた経験がなく、専門家に教えられた芸能もなかなか身につけない。さらに、常に育児、家事などに悩まされており、披露する途中で自宅に帰ってしまったこともある。

写真３　　文芸隊が披露しているハニ族の踊り「鋩鼓舞（マングィウー）」

（撮影場所：箐口村、2006年8月撮影）

事例１　一人の文芸隊の女性隊員――LU（ハニ族、女性、29歳）

LU、29歳、夫、長男、長女とともに箐口村に定住しているハニ族の女性である。元々、小学校に3年しか通っていなかったので、ハニ語しか喋ることができないし、漢字もほとんど書けない。彼女は2004年10月、文芸隊に選ばれた。選ばれた経緯は元のメンバーが都会へ出稼ぎに行って、文芸隊の空席を埋めるように副村長である義兄に頼まれたからという。LUは文芸隊に縛られる時間が多くない、また農作業、家事、育児を同時にできる上、さらに現金収入をもらえると考え、文芸隊に参加した。文芸隊に参加して以来、ハニ族伝統的な踊りもいくつかを教えられており、年を重ねて芸能をうまく披露できるようになった。また、漢語の雲南地方方言や共通語をほんの少しだけ喋ることもできるようになった。彼女の夫は2年前に出稼ぎに行ったが、都会での物価の高い生活を低賃金で賄うことができなくて、半年後に村に戻ってきた。現在は棚田での仕事と牛の世話をしていて、現金収入はほとんどない。従って、LU一家族の現金収入源はLUが文芸隊から得る月300元に頼っている。LU自身も文芸隊での仕事は重要だと認識しているけれども、教えられることを学んでおり、言われた通りに披露するだけで、それ以上の工夫を殆ど凝らしていない。つまり、ただ一世帯が現金収入を得る手段としか考えていない。接待の仕事としての芸能披露が終了後、さっさと自宅に帰り、「質問されたら、どう答えたらよいか分からない」という理由で、できるだけ外部者と接触したくないという。また、新しい歌、踊りなどを学びたい意欲も一切見えない。すなわち、文芸隊のメンバーになることを、村を離れた出稼ぎに行く村民と同じように見なしており、民族衣装を身にまとい、民

族芸能を披露することを「打工（出稼ぎ）」として捉えている。ただし、この「打工」では村離れをしていない。

聞き取り調査によると、他の女性メンバーが文芸隊に参加した経緯はLUと似ている。元々、芸能の才能をほぼ持たない農婦たちが村の行政機関である管委会に選ばれ、受動的に観光開発に参与できるようになった。彼女は既婚者という立場で、これまで未婚者の文芸隊の離れによる生じてきた空白を埋めるように参加させられた。しかし、彼女たちは民族芸能の披露にあまり関心を持たなく、ただ現金収入の獲得を目指し、仕事として受け入れ、働いているといえるだろう。箐口村では新しく嫁ぎにくる女性は毎年増えており、LUのように文芸隊に参加したい人も少なくないという現状である。それにもかかわらず、文芸隊の人数は元陽旅遊局によって決められており、勝手に増減できない。また、当初空いていたポジションを埋めさせるために文芸隊に加入させたLUのような女性たちは、管委会成員の親戚や友人であるために選ばれたという理由で、村民に非難される対象となっている。LUの事例で伺えるように、観光初期にはまったく除外されていたのに、観光化の変化とともに、受動的に観光業に参与できるようになった。彼女が観光の恩恵に恵まれている理由は、彼女自身の持つ才能よりむしろ彼女の家族構成、人間関係に深く関わっていると思われる。

2）能動的な観光開発への参加

太田はホストとゲストの力関係を分析する上で、「エキゾティシズムに訴える観光形態には、確かに抑圧的な構造が存在することを認めた上で、観光を担う人々がいかにその構造に抵抗するか、あるいはそうするために観光のイメージをいかに利用するか、などという問題意識から観光を分析する」という視点の必要性を提起した[太田1993：386]。元陽まで訪れてきた観光客たちにとって、人為的に蘑菇房が保留されてきた箐口村を「原生態」、「時代遅れ」、「貧乏」なイメージとして捉えている。筆者の調査した時点において、元陽地域に定住している現地住民の多くはまだ中国のなかで貧困層に属していた。2006年における一人当たりの年収入は、箐口村が862元である。この数字は中国における「絶対的貧困基準」である一人当たり年収入785元より少し超えているが、経済的に豊かであるとは言えない（注８）。「棚田は確かに綺麗に見えますが、それでお腹が一杯にはならないわ。」と語ったある村民の話は印象深く残っており、美しい棚田が収入に結びつかないことを生々しく反映している。この点は、政府や民族知識人が賛美するような、棚田を開墾してきた知恵と才能を持つ「偉大な民族」というイメージとだいぶ違っている。

箐口村では、伝統的なハニ文化を表象する文芸隊が存在している一方で、政府にとって表象されたくない或いは意図的に隠蔽されている、貧困的イメージを強化して演出している場面が見られる。これから村の「野導（イェーダオ）（非正規のガイド）」を事例として取り上げ、政府による観光

開発から除外された現地住民がいかに観光イメージを利用しているかを明らかにする。2003年、管委会は村の陳列館だけを解説する一名の文芸隊メンバーを設置していたが、村全体を案内するガイドは不在だった。これをビジネスチャンスとして見なし、2004年から自発的に村全体を案内する「野導」を担当している村民が現れた。2005年3月、陳列館の解説員をしていた人がある薬剤会社にスカウトされ、村を離れ省都である昆明へ出かけた。それ以後、管委会は改めて解説員を設置していなかった。これをきっかけに、「野導」は自然に箐口村の案内職を独占してきた。2007年には、箐口村には3人の「野導」がいた。3人ともハニ族で、30代の男性である。以下はガイドLHのガイド業に携わった経緯を例として紹介する。

事例2　箐口村のガイド――LH（30代、ハニ族、男性）。

LH、36歳、箐口村に定住しているハニ族の男性である。既婚ではあるものの、妻は3年前に実家に帰ったまま、ずっと戻っていない。両親と娘一人の4人家族で生活している。本人は右足がよくないので、身体障害者として毎月政府からわずかの手当てをもらっている。箐口村が観光開発される前に、その手当と棚田作業により辛うじて生計を立てていた。2004年、LHは観光客を村一周案内するという新しいビジネスチャンスをつかんだ。普段、彼は村の入口でガイドとして雇ってもらうように観光者を待っている。観光者が入園料を購入する時に、必ず「僕にガイドさせていただけませんか」と一声をかける。訛りのある標準語で村一周を案内し、生の生活をオリジナルなハニ文化として見せた上、案内看板に沿って、自民族文化であるハニ文化を自分なりに説明する。案内しながらも、足が不自由であるにも関わらず常に観光者の重いカメラ機材を積極的に背負う。報酬については、入村する前には、ただ自分の案内したい気持ちを主張するのみで、観光者が聞かない限りは何も言わない。ただし、案内しながら、今までどんな観光者を案内し、喜ばせ、自分がいくらの謝礼をもらったと何回も繰り返して伝える。また自分が身体障害者であることを強調し、仕事の大変さを訴える。それで、観光者に今までの料金を参照にして、今回はいくら払おうと自ら思わせるように巧みに働きかけている。普通は30分―1時間ぐらいの案内につき、20－50元ぐらいお金をもらえるようである。季節により、接待する観光客は異なっているが、平均的に月300－500元ぐらいの収入が儲けられるという。彼は足が悪いため楽な労働ができないが、この商売のおかげで、箐口村でほどよい住居を立てることができた。

LHの事例は、自分の貧乏さ、可哀相さを売りにしている一例であると言えるだろう。彼は自発的に観光業に従事することを通して、観光者が見たい非日常的なイメージをうまく演出し、観光者の考えている「時代遅れ」のイメージに相応しい貧困のイメージをより強化することによって、貧困から非貧困へ転換していく道を歩んでいる。しかし、LHについて話したら、他の村民は殆ど彼を見下しており、棚田の仕事に不器用であり、何の仕事もやりたくない怠け

者だと評価を下していた。村民たちの目から見たLHは、経済的にはある程度成功していても、憧れの存在ではなく、むしろ嫌われるものといえるだろう。箐口村にある他の二人のガイドの状況もLHの様相と似ている。畑仕事や出稼ぎなど体力仕事をやりたくない「懶汉（ラーハン）（怠け者）」であり、賭け事に夢中に打ち込んでいる「賭鬼（ドーゥグイ）（博徒）」であり、これまで村内で最も貧乏な人々であった。それにも関わらず、短い時間内に少なくない報酬を楽に手に入れられるという観光業のメリットは、彼らを他の村民より積極的に観光業へ参与させるようになった。

以上二つの事例から伺えるように、LUとLHは元来、いずれも一般的に認識される優れた才能を備えてはいないし、観光関連の商売を行う経済的な資本や、希少な特異な能力を持たないと見受けられる。彼らは観光開発の初期に、まさか周縁的な存在とされる人々であった。しかし、観光の展開に生じてきた変化により彼らが受動的或いは能動的に観光業に参与するようになった。これは地元民の変化への新しい対応であると同時に、彼らの新しく生み出された生存戦略だとも考えられる。一方、観光開発当初、政府による選ばれた文芸隊メンバーは元来、村内で若さ、きれいさ、学歴あるなど、一般村民より優れた能力を持っているからこそ、早期に観光業に参与することができた。しかしながら、民族芸能のディスプレイを通して、彼らが外部者との交流機会は増えており、村外から新しいチャンスが訪れてきた。従って、初期の文芸隊メンバーは自分の得失を考えており、村内の観光業を諦め、村離れに至った。村のエリートの欠落であるからこそ、それまで除外されたLUやLHのような村民たちに新しいチャンスを与えてきたと考えられる。

5. おわりに

本論では中国雲南省元陽棚田地域の事例として取り上げ、現地で行われた観光開発及び民族観光の開発が地元のハニ族の人々に与える影響を粗描した。そして、特にそれまで周縁的な存在であった地元民がいかに観光開発に参与してきたかという彼らの対応を考察してきた。地元政府はハニ族の伝統的な文化を表象するために、また世界遺産条約に課された「文化を保護する」に相応しい措置を加えるために、2000年から元陽県箐口村で観光開発が行われてきた。箐口村における観光開発の経緯から分かるように、主に政府主導で行われているため、蘑菇房の改築や文芸隊メンバーの構成など、地元の人々に強制力を施している。また、観光による収入源が今までより多くなることは事実であるにもかかわらず、観光収入は基本的に村の経済構造を変化させたわけではなく、観光業に参与している村民は非常に限られていると指摘できる。観光開発初期に、他の村民より優れた技能や、観光関連の商売を行う資本やノウハウを持ち合わせているからこそ、観光業に投身できた村民は数人いた。その後、観光業の展開につれて、観光への認識が変化しており、村内での観光業を諦めて都会へ進出した人が現れた。一方で、これまで除外されていた村民たちも新しいチャンスに恵まれており、新しい生存戦略を持ちながら観光業に参与してきた。従って、観光開発にもたらされたホスト社会内部における二極化

は固定的な存在ではなく、新しい変化に柔軟な対応を取りながら、「負け組」が「勝ち組」へ転化することも可能である。特に指摘したいことは、参与する方式は受動的・能動的を問わず、いずれも観光開発を通して、政府がハニ族の伝統文化を表象しようとする主旨と乖離していない、文化行政に携わる側に示された規範に合わせなければならないという点である。今後箐口村における観光化の動向と地元民の対応が引き続き注目していくと思われる。

〔付録〕

表１　箐口村における観光開発経緯

時期	政府による観光開発	地元民の対応
2000年	元陽県政府は箐口村を「ハニ民俗生態村」と改名し、観光開発を行い始めた。	村内の民家は中身の新旧を問わず、「蘑菇房」に改築された。
2001年10月	入園料を徴収しはじめており、民俗村として開園した。(入園料が一人10元だった)	観光客向けの飲食店、宿屋などが開業してきた。
2002年2月	管理委員会は成立した。	
2003年9月	文芸隊が組織された。（入園料が一人15元に上昇した）	文芸隊に参加した女性メンバーの平均年齢は18歳だった。
2004年	文芸隊のメンバーが入れ替わった。	文芸隊に参加した女性メンバーは全て既婚女性となった。（LUの事例） 自発的に野導を担当している村民は現れてきた。（LHの事例）

〔注〕

1．1989年に出版した*Host and Guest*の改定版――第2版（邦題『観光・リゾート開発の人類学――ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』）において、「社会の衰退の責任をなにもかも観光活動や観光者そのものに押しつけるべきではない」［スミス1991：24］とスミスは述べている。初版において事例調査をおこなった時点から過去10年間の変化について、現地を再調査し、データを更新し、新たな理論による検証を行い、その成果に基づいてほとんど中身が書き改められた濃い内容のものになっていた。その後、2001年にスミスはブレントと連携し、『ホストとゲストを再訪する』（Smith＆Brent2001：*Hosts and Guests Revisited――Tourism Issues of the 21st Century*）を刊行した。

2．現地での聞き取り調査によると、各民族の住み分けは標高に依拠しているという。紅河の河谷地域から約1000mまではタイ族、チワン族が居住する区域となっており、1000mから標高1700m、1800mまではイ族とハニ族が居住している。さらに標高1800m以上はミャオ族、ヤオ族などが住んでおり、河谷から哀牢山の山麓まで標高の高さによりそれぞれが居住する形となっている。

3．棚田の定義に関して、1988年、日本農水省は「傾斜度が20分の1（水平距離を20メートル進んで1メートル高くなる傾斜）以上の水田」を「棚田」として認定する。

4．元陽県旅遊局（観光客）のデータによると、2002年から2004年にかけて、箐口村に訪れてきた観光客の数は増加している。しかし、筆者の調査した2006-2007年のデータによると、箐口村を訪問した観光客が減少している。聞き取り調査によると、棚田の写真を撮影するために訪れた観光客にとって、山から箐口村の蘑菇房をレンズに収めることは村を見学するより好ましいと教えてくれた。

5．本論では、筆者の調査した時点2007年の平均レートにより、１元＝15円で計算する。また、文芸隊メンバーの収入は2003年成立当初に150元だったという。

6．箐口村に関する学術的な書籍と文章は、《云海梯田的寨子》、“箐口村哈尼语概述”、“文化符号的建构与解读”、《诺玛阿美到哀牢山――哈尼族文化地理研究》などである。

7．このデータは雲南大学文化産業学院鄭宇博士の2007年のフィールドワークで収集されたもので、筆者は本論で借用している。

8．中国は1985年に農民1人当たりの年間純収入200元を貧困基準線として設定し、物価指数に準拠する形で年ごとに金額の微調整を行ってきた。その後、当初の「貧困」基準を「低収入」基準とし、その下に「絶対貧困」基準を設定して、基準線以下の人口を把握してきた。その定義は、「低収入」が“教育や医療などの支払いが困難”であるのに対して、「絶対貧困」は“生存に支障がある”であった。2007年に、「絶対貧困」としての年間収入基準は785元、「低収入」としての年間収入基準は1067元となっている。（日経ビジネスオンラインhttp://business.nikkeibp.co.jp、2008年11月22日に閲覧）

〔参考文献〕

＜日本語＞
江口信清
1998 『観光と権力――カリブ海地域社会の観光現象』多賀出版
太田好信
1993 「文化の客体化――観光をとおした文化とアイデンティティの創造」、『民族学研究』57（4）：383－410
兼重努
2008 「民族観光の産業化と地元民の対応」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.29：133－160、風媒社
川森博司
2001 「ノスタルジアと伝統文化の再構成――遠野の民話観光」、山下晋司編『観光人類学』：150-159、新曜社
韓敏
2007 「観光化される毛沢東――中国観光を作り出すしかけ」、山下晋司編『観光文化学』：59－64、新曜社
グリーンウッド、デヴィッド
1991 「切り売りの文化――文化の商品化としての観光活動の人類学展望」、スミス編『観光・リゾート開発の人類学――ホスト＆ゲスト論で見る地域文化の対応』三村浩史監訳：235－256、勁草書房
鈴木正崇
1993 「創られた民族」、飯島茂編『せめぎあう民族と国家』：211-238、アカデミ出版会
スミス、バレーン編
1991 『観光・リゾート開発の人類学――ホスト＆ゲスト論で見る地域文化の対応』三村浩史監訳、勁草書房
曾士才
1998 「中国のエスニック・ツーリズム――少数民族の若者たちと民族文化」、愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.3：43－68、風媒社
瀬川昌久
2003 「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」、瀬川昌久編『文化のディスプレイ――東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』：135－174、風響社
孫　潔
2010 「雲南省における棚田とハニ族のエスニシティ」『東北アジア研究』第14号：123-145、東北アジア研究センター
ナッシュ、デニッソン
1991 「帝国主義の一形態としての観光活動」、スミス編『観光・リゾート開発の人類学――ホスト＆ゲスト論で見る地域文化の対応』三村浩史監訳：51－74、勁草書房
長谷川清
2001 「観光開発と民族社会の変容」、佐々木信彰編『現在中国の民族と経済』：107-131、世界思想社。
山下晋司
2001 「『楽園』の創造―バリにおける観光と伝統の再構築」、山下晋司編『観光人類学』：104－112、新曜社
＜英語＞
Smith, Valene L. ed.
1977 Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, University of Pennsylvania Press, Philadephia

＜中国語＞
马翀炜
2006 “文化符号的建构与解读——关于哈尼族民俗旅游开发的人类学考察一”,《民族研究》第4期, pp61-69

（そん　けつ　中国学科）

2011年11月15日受理